

『オメガバース 淫らなおとぎ話～男は王の身体秘密を知り...～』

著：りんこ

ill：卯陀喜びんぼん

むかしむかし、あるところに、美しい国王陛下がいらっしゃいました。

その国はとても豊かで、人々は皆、国王陛下を敬いながら、楽しく暮らしておりました。

しかし、その国の人々は、残念なことに身分が平等ではありませんでした。

なぜなら、男女としての性別だけでなく、それぞれが「階級」を持って生まれてくるからです。運命とも呼べるその「階級」は、三つに分かれておりました。

王族、貴族、僧侶は必ず「アルファ」で生まれてきます。

平民は「ベータ」で生まれてきます。

そして、人ではあるものの制御しきれない発情期がある「オメガ」は、子を成すだけの役割を与えられて、時には奴隷以下の扱いを受けておりました。

しかし運命は、時に悪戯を起こします。

このお話は、そんな悪戯な運命に翻弄される、二人の出会いの物語です。

「ステラ！ ステラはどこだい？」

その人は広い広い庭園の中を、一人ですっと歩き回っていた。

薔薇が今を盛りと咲き誇っているというのに、その人は見向きもしなかった。草の影まで覗き込みつつ、ただひたすらに歩き続けるのみだ。その歩みは、幾らか早足であった。

「ステラ！ お願いだよステラ！ どこにいるんだい！ 返事をしておくれ！」

いつもであれば輝くように靡く金髪は、白い素肌から滲み出る汗のせいで、額にピタリと貼り付いている。薄いグリーンにきらめく瞳も、今はうっすらとした焦燥を浮かべるだけだ。

その人の名は、ジークフリートという。

齢十八にして「この国」を統治する、美しい国王である。

亡き先王から重責を若くして受け継いで、早や三年が経つ。当初は家臣だけでなく国民からさえも、その若さを不安視する者が多かった。しかし聡明で思慮深い若き王は、その美貌も相まって、今では多くの国民からの尊敬を一身に集めている。

「ステラ！ ステラ！」

いつもなら多くの重臣や近衛兵に囲まれているが、今、そのジークフリートの周りには、誰もいない。自分の自由な時間を大切にしたいと、こっそり王宮から抜け出してきた。それが仇になるとは、思ってもいなかった。

「ステラ！」

そう叫んだ後、ジークフリートは激しくむせた。そう言えば、しばらく水すら口にしていない。掠れた喉の奥から、ほんのり血の味が滲んでくる。上半身を折り曲げて咳き込んでいる途中で、額から一粒の汗が土へと落ちていった。

「どこ、行っちゃった、んだろう……」

普段纏っている威厳はどこかへ置き忘れたかのように、その声は弱く細い。

ステラ。

それはジークフリートが唯一、心を許している相手の名であった。少し年上に当たるステラは、姉のような存在であると同時に、最も愛している相手である。生まれた時からずっと一緒だった、大事な大事なステラ。

そんなステラが、ほんの一瞬だけ目を離れた際に、いなくなってしまった。

慌てないはずがなかった。

まだ整い切らない呼吸を、深く息を吸い込むことで誤魔化したジークフリートは、足を引きずりながらも再び歩き始めた。そこから先は自分と同じぐらいの背丈のある、植木で囲われた迷路のような道が続いている。ステラにとっては、隠れやすい場所だとも言える。

恐らく三回目になる同じ道の探索を、ジークフリートは躊躇わなかった。

「ステラ！ 返事をしておくれ！」

見上げれば青い空が広がっているものの、左右を背の高い植木で覆われているせいで、視界が幾分暗く感じられる。足下に広がる影のせいで、ステラを見逃してしまわないよう、ジークフリートはゆっくりと歩いた。

彼女を探すには視覚だけでなく、聴覚も研ぎ澄ます必要がある。微かな物音にも、敏感でなければいけない。神経をピンを張り詰めながら、足を進めていく。

その時だった。

カサリ。

何かが動く音がした。それは明らかに、生きている「何か」が発する音だった。

風は今、ヒラリともそよいでいない。

「……ステラ？」

相手を驚かせてしまわないよう、ジークフリートは低く小さい声で呼び掛けた。すると聞き覚えのある声が、小さく聞こえたような気がした。

「ステラ！」

自分呼んだ声の方角へ、ジークフリートは一気かつ全力で飛び出す。今すぐ確実に、彼女を捕まえなければいけない。まだ疲れが残っている足が絡まりそうだったが、それでも懸命に走った。

この角を曲がれば、ステラがいる。

願いを胸に秘めながら、必死の思いで角を曲がった瞬間、何かにドンとぶつかる。勢い良く走っていたせいもあって、ジークフリートは跳ね返され、その場で派手にひっくり返った。

「あっ……！」

このままでは、ステラを逃してしまう。痛みを感じる間もなく顔を上げたジークフリートの前に、大き

な影が現れた。

「おっと……これは、失礼」

にゅっと差し出された掌を、条件反射で掴んだジークフリートは、その手に引っ張られるがまま立ち上がった。顔を上げると、そこには目元をマスクで隠した、見知らぬ男がいた。

そして、その男の左腕には。

「ステラ！」

怯えたような表情で男の腕に抱き込まれていたステラを見て、ジークフリートは美しい緑の目を大きく見開いた。そしてさっき助けてもらったことなど忘れて、男の手からステラを奪い取る。

「ステラに何をした！」

思わず叫んだジークフリートに対し、男は苦笑いを浮かべるだけであった。

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>